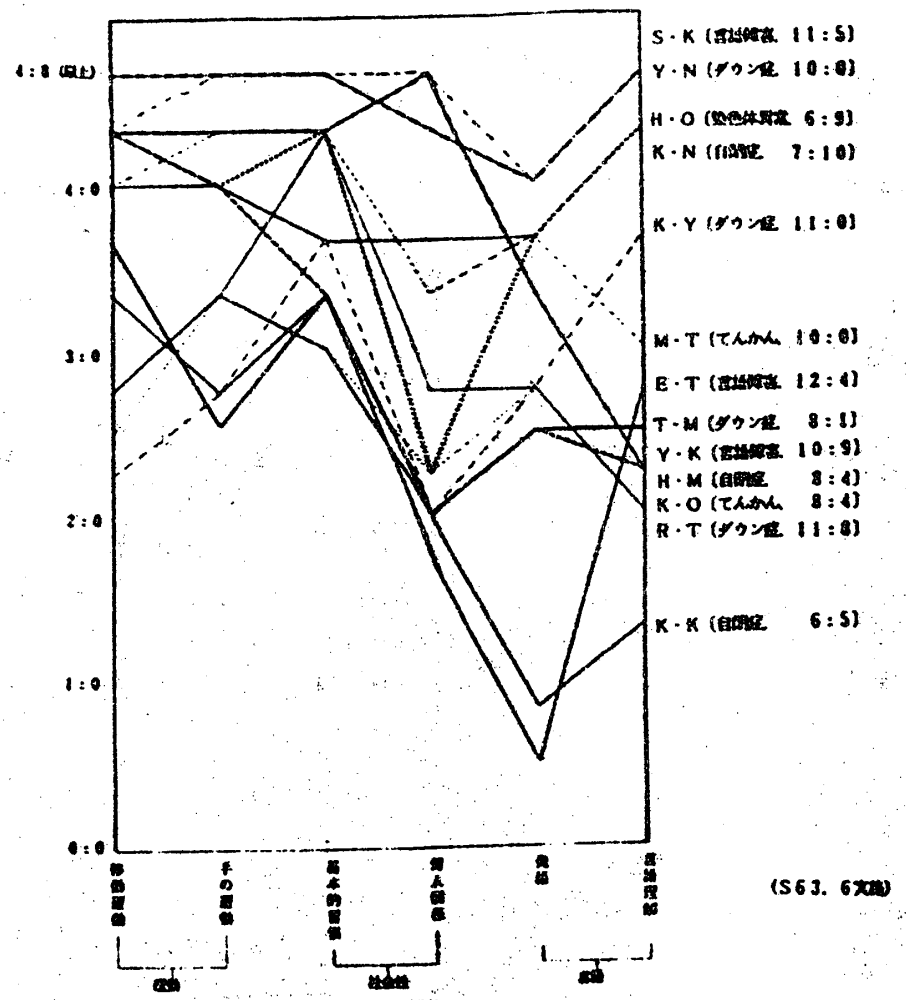
3．遠城寺式乳幼児発達検査



○ 遠城寺式乳幼児発達検査による児童の実態

- 移動運動、手の運動とも運動面は2才3か月～4才8か月（以上）である。移動運動は平均して、ほぼ3さい半くらいである。手の運動も、移動運動とほぼ同じような結果がでている。
- 基本的習慣は全員3才以上であり、他項目より高くなっている。生活年令の効果が着脱、食事といった身辺処理の面に現れているといえる。同じ社会性でも、対人関係は低い子が多く、特に自閉的傾向の子が低いといえる。
- 発語も個人差が大きく、特に遅れが目立つ子が2名（言語障害、自閉症）いる。能力の高い子が少なく、上限は4才までである。発語より言語理解が劣る子が5名おり、認知の力に問題をもつ子が多いと思われる。

⇩

- 小学部児童の発達はだいたい2才3か月～4才8か月（以上）の発達を示している。運動面もほぼ同じくらいの発達である。
- 領域間（運動、言語、社会性）でのばらつきが見られ、個人差、個人内差とも差がある。
- 運動や基本的習慣に比べて、対人関係や言語面が劣っている。

○ 指導にあたって

- 健常児の2才半～5才くらいまでの子供たちが経験する動きを、多く経験させるとともに、個々の子どもの発達課題を明確に設定して指導していく。
- 個々の個人差、個人内差に配慮して指導していく。
- 運動面と言語面とを関連づけながら指導していく。